

# 欺瞞コミュニケーションの解読に関する研究

## —嘘をつく行為者と嘘を見抜く判断者の感情に基づく考察—

朴 喜静

### 第1章 本研究の理論的背景

本論文の目的は、次の3点である。1)嘘をつく行為者の視点から、嘘をついているときと真実を話しているときとで、非言語行動にはどのような差異があるのか、2)実際に嘘をつくときに表われる非言語行動と、われわれが思い込んでいる嘘のステレオタイプにはどのような差異があるのか、3)嘘を見抜く判断者の視点から、判断者の感情状態が真偽性判断にどのような影響を及ぼすのかについて検討することである。

従来の欺瞞研究では、研究者が嘘をつく状況を操作して、行為者が嘘をつくときに表われる非言語行動を測定したり、嘘をつく場面の映像を判断者に提示し、その映像が真実かどうかを判断するという手法が取られてきた。しかし、嘘をつく行為者と嘘を見抜く判断者には、「感情」が影響する。行為者は、嘘をつくときに生じた感情によって特定の行動をする。また、判断者については本人がどのような感情状態に置かれているかによってその判断が影響を受けると考えられる。そこで本研究は、従来の欺瞞研究では扱われてこなかった、行為者と判断者の「感情」に注目し、嘘の解読過程を明らかにする。

### 第2章 問題の所在と本論文の目的・構成

従来の欺瞞研究は、1)行為者の非言語行動に影響する要因として、その多くが状況要因について検討していること、2)真偽性判断の正答率を低下させる原因となる欺瞞のステレオタイプについて非言語行動にのみ検討されていること、3)真偽性判断の精度を向上させる状況要因の究明に偏重していること、という3つの問題点があった。

そこで本研究では、行為者と判断者それぞれの「感情」に注目し検討した。具体的には、第3章では、行為者の感情統制能力が嘘をつくときに表われる非言語行動にどのような影響を与えるのかについて検討した。第4章においては、真偽性判断の正答率を低める原因となる、欺瞞の言語的・非言語的ステレオタイプを明確にした。さらに第5章では、真偽性判断の精度を向上させる要因として判断者の感情の有用性を検討した。

### 第3章 嘘をつく行為者の個人特性と非言語行動の関係に関する実験的検証

第3章では、行為者の観点から、その個人特性によって、嘘をついているときと真実を話しているときのそれぞれにおいて、非言語行動にどのような違いが生じるのかを検討した。

まず、質問紙調査の結果得られた個人特性のうち、感情コントロール能力によって真実を話しているときと嘘をついているときとで顔面表情と非言語行動がどのように異なるかを検討した。その結果、嘘をついているときには、イラストレーター、身体の動きという身体動作と反応潜時、言いよどみ、発話休止というパラ言語が減少することが示された。これは、嘘をついているときに自分の行動を意図的に抑制するため、生じたものと考えられる。このような行動は相手に硬直しているような印象を与え、むしろ嘘の手がかりになる可能性が示唆される。また、顔面表情については、偽りの微笑、微表情、AU2(眉の外側を上げる)、AU23(唇を固く閉じる)、AU24(唇を押さえつける)の表情筋を増加させたが、真微笑(唇の両端を引き上げて目の周りの筋肉の動きを含む表情として本当に幸福感を感じる時に表われる)を減少させた。このような顔面表情は、嘘をつく状況が不安や緊張感などのネガティブ感情を引き起こしたことによるものと考え

られる。

一方、行為者の感情コントロール能力が高い場合、緊張や不安をうまく統制するため、ベースライン条件、真実条件、そして嘘条件間で手の動きに変化は見られなかった。一方、感情コントロール能力が低い場合は、各条件間で手の動きの変化が大きくなりやすいことが示された。つまり、嘘をつくときに生じる感情をうまく統制できれば、平静を保つことが可能になり、嘘をついているときと真実を話しているときの行動の違いが少なくなると考えられる。加えて、感情コントロール能力の低い者より高い者の方が瞬目が減少するのに対し、AU12(唇両端を引っ張り上げる)の動きが多くなった。このことから、感情コントロール能力が高い者の場合、嘘をつくときに緊張感や不安などを統制し、外見的に平静を保ちながら微笑むこともできるが、瞬目については減少したと考えられる。

以上の検討結果から、感情コントロール能力によって、行為者の非言語行動や顔面表情の表われ方が異なることが確認されたと言えよう。

#### 第4章 欺瞞に関するステレオタイプ調査

第4章では、実際に嘘をつくときに表われる非言語行動と、われわれが思い込んでいる嘘のステレオタイプにはどのような差異があるのかについて検討を行った。

その結果、嘘をつくときには、反応潜時、言いよどみ、声の高さ、視線回避、瞬目、頭の動き、胴体の動き、触る行動、手の動き、足の動き、発言内容の矛盾性が多くなることが示された。これに対し人は、発話休止、イラストレーター、微笑み、姿勢を正すこと、論理性の高さなどについては真実を話すときと嘘をつくときとで差がないものとして捉えており、一方詳細な内容の説明は嘘をつくときには少なくなるというステレオタイプを持っていることが明らかになった。さらに、言語的・非言語的特徴(e.g., 視線回避、内容の矛盾性、言いよどみ、触る行動、瞬目)も、嘘を判断する際に重要な手がかりとして採用されることが示された。

以上の検討結果から、単純に人は「嘘をつくときに様々な非言語行動が増加する」というステレオタイプを持っていることが示された。これに対し、言語的側面に関するステレオタイプとしては嘘をつくときに内容の矛盾性が多くなり、詳細な内容の説明が少なくなるという、実際に嘘をつくときに表われる言語的特徴と一致することが確認された。

#### 第5章 感情状態が真偽性判断に及ぼす影響についての実験的検証

第5章では、判断者の視点から、その感情状態が真偽性判断にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。

その結果、判断者の感情が悲しみの状態である場合、受けたメッセージの言語的内容により注目して判断するため、真偽性判断の正答率が高くなった。これに対し、判断者が喜びあるいは怒りの感情状態の場合、受けたメッセージの言語的内容よりも送り手の非言語行動により注意を向けて判断するため、判断の正答率が低くなった。このことは、悲しみはシステマティックな処理を活性化させ、注意深く言語内容により注目するため、正答率が高くなるが、喜びと怒りはステレオタイプに基づいた情報処理を活性化させ、そのために非言語行動により注目することになり、正答率が低下することが示唆された。

一連の研究結果から、判断者の感情状態、特に悲しみが真偽性判断の精度を向上させることが確認された。

#### 第6章 総合的考察

行為者は嘘をついているときになんらかの非言語チャンネルを使用し、そして判断者は行為者のメッセージが嘘かどうかを判断する。これらの一連の過程において、行為者の欺瞞行動と、判断者の欺瞞に関するステレオタイプとの乖離が正確な嘘の解釈を妨害する原因となる。

本研究は欺瞞コミュニケーションにおける行為者と判断者の「感情」に注目し、嘘の解釈過程を明らかにすることを試みた。

嘘をつく際にはそれを見破られるのではないかという不安、罪悪感、相手を騙す喜びという3つの感情が生じると指摘されている(Ekman, 2001)。嘘をつくときに引き起こされるこのような感情は行動に影響する。嘘をつくときに生じる感情の統制能力には個人差がある。本研究の結果から、嘘をつくときに生じる感情をコントロールする能力によって非言語行動の表われ方が異なることが示された。したがって、これらの個人特性による行動の差異を認識することは、正確な嘘の解釈につながるであろう。

以上のように、従来の欺瞞研究では、嘘に関わる行動の手がかりについて多くの研究が行われてきたが(e.g., DePaulo et al., 2003; Vrij et al., 2000)、真偽性判断の正答率はチャンスレベルに過ぎないと報告されている(Bond & DePaulo, 2006)。その原因として、嘘を見抜く判断者のステレオタイプと、実際に欺瞞と関連する行動の手がかりとは乖離しているため、正確な嘘の解釈が妨害されてしまうことが挙げられる。そこで、真偽性判断の正答率を高めるためには、判断者が真偽性判断をする際に採用する嘘の言語的・非言語的ステレオタイプを把握し、それを明確にした上で、真偽性判断を向上させる要因を探る必要があるだろう。本研究の結果から、嘘をつくときに表われる非言語行動は、個人的・状況的要因によって異なるにも関わらず、人は嘘をつくときに非言語行動が増加するというステレオタイプを持っていることが確認された。これに対し、言語的側面では嘘をつくときに発言内容の矛盾性が多くなり、詳細な内容の説明が少なくなった。これについてはステレオタイプと一致することが示された。しかし、人は自分が思い込んでいる誤ったステレオタイプに基づき、ある人が視線を回避すると「あの人は嘘をついている」というように判断する傾向があることが明らかになった。

本研究では判断者が誤った嘘のステレオタイプを利用して判断しないようにするための要因として判断者の「感情状態」を取り上げた。本研究の結果から、嘘の解釈の精度は判断者の感情状態によって向上させられることが示された。特に、判断者がどのような手がかりに注意を向けるかによって判断の精度が異なることが示された。このことから、ある人が嘘をついているかどうか判断するに先立って、判断者は判断を妨害するステレオタイプの判断の予防策として、自分の感情をコントロールするトレーニングが必要であることが示唆される。また、本研究は嘘の判断に至るまでのプロセスを解明するために判断者がどのような感情状態にあり、どのような手がかりを用いて判断するのかについて検討した。このような研究により判断する本人がどのような感情状態で、どのような根拠に基づいて判断したかを振り返ることによって、より正確な嘘の解釈をすることが可能となるだろう。

本研究の結果をまとめると、嘘をつく場面では、行為者の感情により言語的・非言語的の手がかりが表われ(記号化)、判断者は、これらの手がかりに基づいて嘘かどうかを判断する。このような一連の過程を欺瞞解釈と呼ぶ。その中で、判断者は、自分が持っている嘘のステレオタイプを利用して判断する傾向があり、嘘と実質的に関連が認められていない非言語的ステレオタイプを利用することで、真偽性判断の正答率が低くなる。また判断者には、多様な感情が生じており、判断者の感情状態が正答率を増減させる要因になる。すなわち、判断者が喜びあるいは怒りの感情状態の場合、単純に嘘をつく行為者の非言語的の手がかりに着目して判断するため、正答率が低下したが、判断者が悲しみの感情状態にある場合、システムティックな処理が促進されるため、言語的の手がかりに注意が向けられ、正答率が高くなった。このような一連の過程を解明することで、より効果的に嘘の解釈をすることができるのではないかと考えられる。

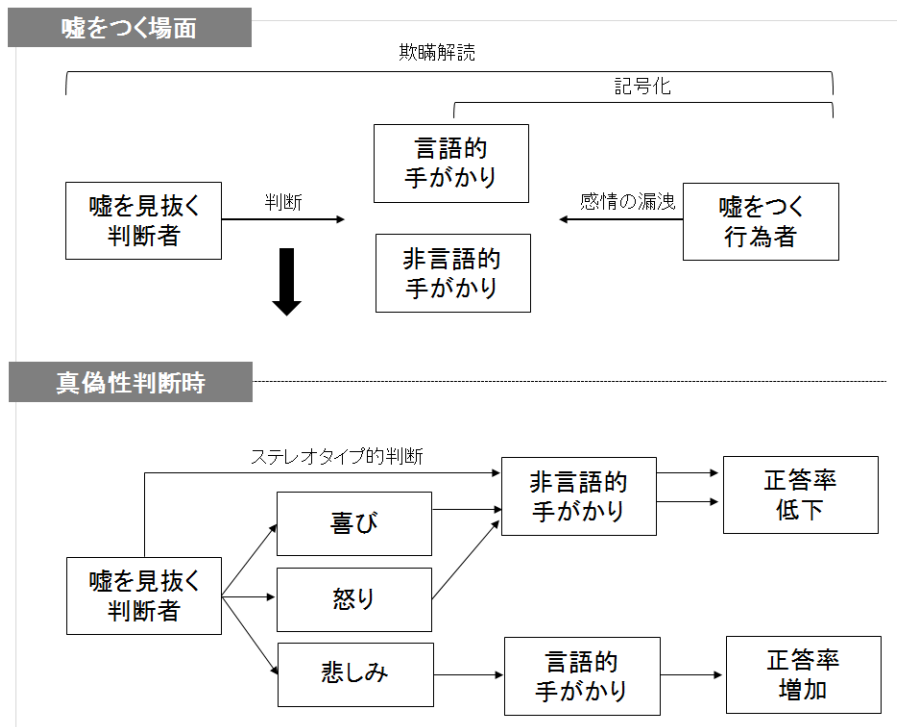


Figure 1 本研究から導かれた真偽性判断へのプロセスモデル

以上の結果は、正確な真偽性判断を必要とする捜査場面への応用に役立つであろう。捜査場面では、判断者が嘘をつく行為者の言語的・非言語的手がかりを観察し、それに基づいて正確に判断しなければならない。行為者の感情統制能力によって非言語行動の表われ方が異なることを認識すること、自分がどのような嘘のステレオタイプを持っているかを把握すること、そして嘘かどうかを判断する際に判断者の感情をコントロールする方法などのトレーニング・プログラムを開発することで、効果的・正確な嘘の解読が期待される。

欺瞞研究領域において、欺瞞コミュニケーションの解読の研究は進展しつつある。本研究の基礎的知見を基盤とし、実践的応用へ拡張させることで、欺瞞研究の発展が期待される。(社会心理学)